クローズアップ道徳科

令和２年度　都小道研研究発表会「鼎談」を視聴して

後藤　忠　2021.03 末まとめ

A 氏:「 失敗したっていい、間違ったっていい、負けてたまるかの気概を教師がもつ」、私に足りないのはここ。子どもに「教室は間違えるところ」と言っているけれど、自分がその気概を本当はもっていないのではないか…、もちろんベストは尽くすけれど自分が「失敗しないように」という心でベストを尽くしているのではないか。子供たちのためにベストを尽くそう、そうすれば授業が楽しくなる！と思った。

日々時間がなさ過ぎて、指導書をどうしても頼ってしまう。研究授業などは指導書に頼らず考えるけど、日々の授業はどうしても…。週 1、道徳だけでも、2 週に 1 度でも考えて授業をしたい。でも時間がない。でも少しでも考える。自転車の上とかでも。

「道徳的態度とは、豊かな心情と確かな判断力に裏打ちされた道徳的行為への身構え」すごく分かりやすかった。後藤先生は、道徳用語を明確に話してくださるから、私でも分かりやすい。

「自分事として考える＝もし自分だったらどうするかと考える」ではない。先生から問われなくても子供は無意識に「自分だったら」と考えている。しかし、先生からそう問われると、「一瞬にして我に返り、損得利害が渦巻く日常に引き戻されてしまう」、「今までの自分はどうだったか、今の自分はどうか、これからの自分はどうか、と子供が自然に考えるような条件を整える、それを考えるのが先生の仕事」子供が自分事として自然に考えられるような授業、すごく難しい。教材選定、提示、発問がかみ合った時にそういう授業が生まれると思う。日々研究していかなくちゃいけない。

B 氏 : 後藤先生、朝倉先生、染谷先生、お世話になった先生方による鼎談で、道徳の時間の大切さや本質について再認識することができました。うちの学校の先生方にも紹介したいと思いました。若い先生でもいい教材を選んで、いい提示ができたら 8 割はうまくいったと思っていいとのお言葉に私自身もほっとさせていただきましたし、ぜひ自分のクラスで実践を重ねていこうと思ったし、伝えていきたいと思いました。

先生方の中に、大事な一時間を他の授業に替えて何とも思わない人はほとんどいなくなったと信じたいと思っています。道徳授業の本質についてお話しいただいたことを、自分の学校も若い先生が多いのでしっかりと伝え、まずは学年から一緒に考えて授業を積み重ねていきたいと思いました。

朝倉先生が最後に話された東京都教職員研修センターの指導資料も楽しみです。来年度こそはしっかりと時数確保できるといいなと思っています。

今、北野武さんの「新しい道徳」を読んでいます。「いいことをすると気持ちがいいのはなぜか」北野武さんがおっしゃっていることと後藤先生がおっしゃってることは「同じなのでは？」と思っています。価値を押し付けて教えるのではなくて、自分で考えてどう生きるかを見付けていくということではないかと思いました。

C 氏:道徳の教科化で「評価のための指導になっている」ことについては同感です。総合的な学習の時間や生活科のときにも同様であったと思います。

こんな時こそ、都小道研で勉強している人たち（若い人も含め）が各地区や各学校で、他の教員の不安を払拭し、本来の道徳のあるべき姿やすべき指導を地道に伝えていくことが大切だと思いました。これは私が体育や総合を勉強させ

ていただいたときに心から思ったことであり、やってきたことです。

生き方について道徳の指導の観点からお話しいただき、とても分かりやすかったです。

個人の生き方は人それぞれであったり、学問（哲学等）であったりで、とても難しいと思います。自分なりの答えもなかなか見つけられません。

最後の、先生たちへのエールは胸を打ちました。管理職が先生のような方ばかりであれば、もっと胸を張って、誇りをもって、この仕事ができるのではと思っています。

D 氏：昨日、私的な研修会（算数）で、鼎談の動画を視聴しました。

算数の話題ではないのに、結構みんな真面目に視聴していました。その時の若い先生の感想をいくつかお伝えします。

「教科書以外の教材を使ってもいいのか」、「体験的な活動ということで身近で起こった体験を扱ったが、利害関係があるので雰囲気が悪くなった。日常での出来事を扱わず、同様な事を扱っている教材の必要性がよく分かった」、「生活指導的になっていることを反省した。心を耕すことにシフトを移したい」、「自分には難しい話だったが、これから道徳教育を考えるヒントになった」、「道徳科の授業を自分一人で悩まず、先輩や同僚に相談して教えてもらうことをしたい」

算数ばかりやっている人が多いので、こんな感想ばかりですが、お知らせして御礼といたします。

E 氏:今回の鼎談では、教材の重みというものを改めて考えさせられました。教材がいかに子供の心を映すか、また、子供は教材提示で自然と考えずにはいられなくなること、そのような教材提示をしなくてはいけないことを痛感しました。

教科書を教えているようではダメということについて、教科書を教えようとは流石にしていないつもりでも、ついそうしてしまったり、価値の押し付けをしてしまったりしていると思いました。

しかし一方で、道徳のことをあまり分からない先生のほとんどは、教科書を教えなきゃと思っているし、読み取り道徳をしています。

また、誰のために授業をしているのか、自己満足であってはならない、目の前の子供たちと共に考えるということが大事なんだなとあらためて思いました。

授業がうまくいかないと、つい子供の方に原因をもっていってしまうことがあります。そうではないと分かっていても、ついそう思ってしまいます。自分のための授業ではなく、子供のための授業であることを忘れずにいなくてはいけないと思いました。

道徳の特質をしっかり理解し、児童の心に響き、児童が考えたくなる教材を選び、しっかり分析し、命をかけて提示し、シャープな発問をすることに努力します。

F 氏:提出された指導要録の所見を見るために出勤した昨日、都小道研研究発表会での鼎談を拝見しました。

教師用指導書のことを語られた時の、「ねらいがあいまいなままに展開を考えている」とか、「教材提示が大事！」と力説されているご様子から、後藤先生はブレルことがない！と思いました。

校長自ら先頭に立って、一生懸命研究に取り組むと教員も頑張って付いてくるということを語られている時は耳の痛い思いをしました。

子供も教員も言った通りにはなかなか育たない、でも諦めたような背中は見せてはいけない。「必ず糧になるから失敗を恐れるな」という覚悟を校長自らがもっと前面に出さなくてはいけないと思いました。

文責：後藤